Special Lecture　"Living with the sea" -- – The Folklore of Adaptive Reconstruction for our sustainable future.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/523

〈特別講義〉

「海と生きる」ー順応的復興の模索

―― エコロジカルな伝承の未来のために ――

千　葉　　一

東北学院大学非常勤講師

1．インドというフィールドから

2011年３月11日の東日本大震災後，その緊急支援や復興に関与することになりました。気仙沼市本吉町大谷の実家，生まれ故郷の本吉町前浜が被災したことが直接の契機でした（地図）。前浜の人々とは，1990年代後半から地元学的な地域再認識活動や住民文化祭，勉強会等を共にして来ました。

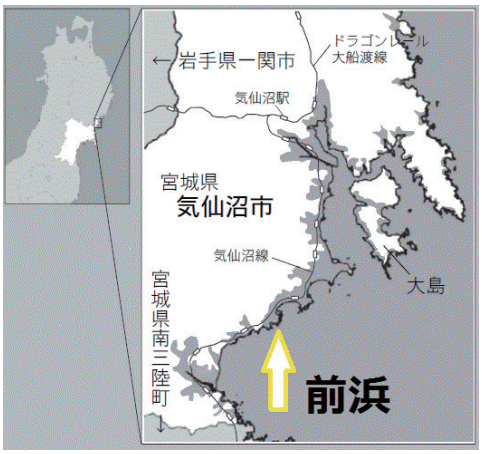

図１　気仙沼市の津波浸水域
NPO法人宮城資料ネット（http://www.hanadataz.jp/td/saigai2011/kesennuma/kesennuma.htm）より引用。
※JR気仙沼線は復旧の目処がたっていない。

その一方で私は，専ら南アジア，特にインドの地域文化研究に携わって来ました。例えば，リンガーヤタと呼ばれる人々の宗教改革運動の歴史やそれに関連するコミュニティの相互扶助や集中再分配の在り方，彼らの農耕儀礼や植物の利用法（儀礼食）などに関心を持って来ました。同時にそれは，バクティ（信愛・帰依）と呼ばれる彼らの信仰スタイルを基本としたカースト否定など社会改革，さらには社会開発やコミュニティ開発の側面に注目する事でした。その彼らから学んだこと，それは地域の人々が抱える問題へのアプローチにおいて，その伝統や信仰，「大事にしたいと感じていること」等々をできうる限り理解するエスノグラフィカルな調査を前提とすると言う事だったと思います。それは，被災地の復興や支援に係わる場合にも，全く同じことではないでしょうか。外発的な問題解決，その適用の前に，その地域の受け皿，歴史文化的な土壌など内発性の確認が重要である事は言うまでもありません。

日本と同様，インドにはれっきとした稲作農耕文化が存在しています。そのイネや米，穀霊と死者に対する特別な感覚があります。コメや稲藁に宿る稲魂など超自然的力を，火伏・子供の成長・肉体や魂の活性・冠婚・葬祭など除災招福をもたらすものとして，また人の命や死者の魂と不可分なものとして信仰しています。地域によっては，雑穀や根栽，クワ科植物などに同様の力を見ています。こうした主食作物などシンボリックな植物に対する地域住民の態度や心性に出会う度，私はいつも感銘を受けて来ました。

また，日本の虎舞いや獅子踊りと同様に，山や森など異界からの超自然的力を里に媒介する存在としての蛇（コブラ）やイノシシ，トラと言った動物に関係する呪術や祭りに参加する度に感じた事があります（**写真１**）。それは，人間のその地域社会の安定と言うものが決して自律的なものではなく，相待的な縁起性，或いは謙虚な他律性の問題なのかも知れないと。その信仰や伝承の理性のもとに展開する，自然界との生態資源やエネルギーやミネラルなど諸要素のトランザクションを

象徴するような行為化の反復。それはある意味，私たちの生活空間における「贈与・受贈・返礼」と言った贈与原理の必須・継続を強く主張しているように思われました。

インダス文明の発掘現場，西インドのカンメル村で出会った女性作業員たちの識字率は，わずか5.45％でした。しかし彼女たちは土間のコーティングを始め土に関する伝統知を継承していました。民族考古学的アプローチとして，女性たちの伝統知を活用して4000年前のインダス期の床面の検出作業等を実践したことがあります。都市やITを中心としたインド経済の成長過程から排除されている彼女たちが，自己の潜在能力を活かし，積極的に社会参加できる様な社会開発のヒントが，土着文化の中に秘められています。

また，インダス期の主穀の一つエンマーコムギが，インドでは今でも遺存的に栽培されています。その気候風土や生態系に順応し，病気や雑草にも強い性質を持つこの古代小麦を，人々は原始的な粥料理や諸儀礼に必須の穀物（儀礼食）として伝えて来ました。現在，高収量近代品種への作付け転換が奨励される中にあって，エンマーコムギの伝統的生産者自身が，単なる商品作物ではない「幻の古代小麦」「食の世界遺産」を生産する文化的意義や誇りを持つ事は，住民参加型のコミュニティ開発を模索する上で大きな力になります。近視眼的な生産性拡大のための，風土や生態系を無視した高収量品種の安易な導入が，塩類集積や農民層の両極分解，さらには社会不安という副作用を伴っている事に留意する必要もあります。

上述したシンボリックな動植物の認知，死者や他界との交流，贈与原理の再考，ジェンダーと分限，生態適応，近視眼的生産効率への疑問，そして誇り。その内発的な「伝承の理性」，或いは「近代の過剰」を確認する上で，また惨事便乗型の箱物・空間復興とは異なるコミュニティや心の復興に携わる上で，インドでのフィールドワークの経験は不可欠なものだったと思います。本稿では，その復興や防災・減災に係わるエコロジカルなコミュニティの在り方とは何か。生態系と伝承に順応した小さな復興の試みを，ツバキという植物に焦点を当てながら，考えてみたいと思います。

２．コミュニティという災害対応能力

津波で多くの地区集会所（コミセン）が流失しました。気仙沼市本吉町の旧前浜マリンセンターもその一つです。しかしそれは，2013年９月15日に気仙沼市の中で最も早く再建されました。市の財政に依らず，自前で支援金を調達し，住民自ら塩害立木の伐採にも参加し，屋敷森の木を建築木材として提供しました。製材，乾燥，部材の組み立て，壁板の加工，壁塗り，縁側の床張り等々，設計も含めた多くの建築工程に住民が参加しました（**写真２**）。そうしたプロセス自体が復興であり，コミュニティの再建であり，同時に地域の防災・減災と災害対応能力の向上に繋がるという意識からです。このコミセン再建プロジェクトは，そうして成し遂げられました。

再建された「東日本大震災復興記念，前浜マリンセンター」は，避難所指定も受けた防災・減災の施設です。言うまでもなく，地域の方々の紐帯を形成維持する中核施設ですし，その相互的な人間関係が災害などいざという時に大きな役割を果たします。それは実際に，東日本大震災後の前浜地区の避難所で確認された出来事でした。

旧前浜マリンセンターでは，地域の文化行事などが頻繁に行われて来ました。例えば，地元民俗の再認識とコミュニティ開発の性格を持つ「前浜，おらほのとっておき」という活動や「熊野神社祭典奉納演芸会」（ふるさと祭り），新年会，敬老会，「大漁唄い込み」，民謡大会など民俗芸能等々。そうした集いを通して培われた人間関係や役割分担などの協力体制は，震災後の避難所・災害対策本部（お寺の物置）の運営にそのままシフトされ活かされました。お祭りや地域行事などを中心になってお世話し開催して来た人たちが，行政の関与もなく，避難所となった地元のお寺の清涼院をハブとして８箇所の民間の非指定避難所を切り盛りして見せました。そしてその協力体制は，そのまま前浜マリンセンター再建へと連なって行きました。

３．前浜マリンセンターの持続可能性

この前浜マリンセンターには，地元前浜の木材が約90％使われています。蓄積された里の資源を活用した地産地消です。しかしこの再建プロジェクトは，見方によってはまだ完遂されてはいません。その建築木材の伐採跡地や津波浸水域や宅地の法面など屋敷森の復元に，ツバキやシロダモ，マサキ，ヒサカキ（後者２種はサカキと見なされ神事に使われている）等，地元の海岸植生（モミやカヤ等の針葉樹やケヤキやマユミ等の落葉樹も含む。モミは化粧板材として，ケヤキは臼など農具に，カヤの実やマユミの新芽は食料に利用されてきた）を基本にした照葉樹の森を造る試みが，静かな着実な歩みとして始まっています。

このマリンセンターの再建を可能にしたのは，今は亡き地域の先人たちによる植樹です。それは見方を変えれば，災害に見舞われた子孫たち「未来への贈与」だったと思います。死者という過去が，災害からの復興という現在を支えている。その贈与を受け取り，マリンセンターを再建した縁起において，私たちには彼ら死者たちへの恩返し・返礼が課せられています。それは如何にしてなされるべきでしょうか。もしかしたらそれは，先人たちの生き方を踏襲し，未来に向けて樹を植えることではないかと思います。それはむしろ，ご恩返しというよりもご恩送りというべきものです。

この植樹という「死者たちを生きる」行為を通して，私たちは過去と未来を確かに繋ぐことができるのかも知れません。それは，未来の前浜マリンセンターの建設プロセスの始まりでもあり，未来の人々の防災・減災に寄与する持続可能な地域社会のための伝承的な回帰と反復だと思います。

４．自然素材の活用が導く住民参加と高齢社会

理念として，前浜マリンセンター再建と植樹活動は，地元木材資源を巡る「贈与，受贈，返礼」の贈与原理の通時的な（過去･現在･未来にわたる）関係と言えます。しかし忘れてならないことは，敢えてマリンセンターを木造（一種のグリーンインフラ）化したことです。ハイテクや特殊素材などはその扱いの専門性が高く，建設プロセスは専ら工事業者に委ねられます。しかし地域の生態資源としての樹木を活用することで，ローテクを駆使した住民参加が可能となり，楽しく協働する地域の紐帯も促したえと言えます。更には，海や畑仕事で培った高齢者の方々の驚くべきロー（老）テク，アワビも獲れば，イチゴも作るし，大工仕事もこなす小器用な爺ちゃんたちの大活躍がありました（**写真３**）。

自分たちの木材を使い，自分たちで設計や作業にも携わる。公共施設に対するオーナーシップ感の醸成や「新しい公共」の模索において，地元の木材という自然の恵み（或は死者からの贈与）と高齢者の能力は大きな資源でした。しばしば，高齢社会の負担の問題が取り沙汰されることがあります。しかしもしかしたら私たちは，高齢者の方々が秘めた知恵と経験，技能と言ったものを正しく認識し，そして地域社会に確実にハーネスする術を諦めているのかも知れません。それは，若年・壮年層のスピードや生産性を高く評価する市場主義経済故の盲目ではないでしょうか。自然環境に順応した伝統的暮らしの中で培われたお年寄りたちのマルチな手仕事。環境と伝統とサバイバル（災害対応能）力，社会参加，高齢者の能力の再認識，そして健康寿命の伸長，介護医療財政の軽減，持続可能な高齢社会など，地域の生態資源を活用した木造によるマリンセンター再建は，多くの要素がそこに盛り込まれていることを私たちに教えてくれました。

ここでの植樹という行為も，単に「植えればいい」「森ができればいい」というものではありません。樹木という地元生態資源の活用が，種子の採集・育苗・植樹地整備・植樹・育樹のプロセスに住民参加を促すことが大切です。住民の伝統知や多様な発想と能力，そしてロー（老）テクをその作業工程の中に活かし，未来への生態系サービスの向上に繋げて行くことが大切だと思います。高齢社会にとって，商品経済や市場アクセスの問題は大きなテーマです。しかし高齢社会であるからこそ，手を伸ばせば直ぐ目の前にある自然の豊

かさ，自然の供給物など生態系サービスの豊かさが必要だと考えます。それは高齢者の自立を助け，持続可能な高齢社会の姿を模索することでもあると思います。

５．WAVOCとの協働，そして戸山団地へ

ツバキなどの植樹に向けた活動は，既に「前浜，おらほのとっておき」グループの人々を中心に，早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）との協働のもとに「前浜，椿の森プロジェクト」として，「ゆっくり」としかし確実に動き出しています。

2012年から，WAVOCの廣重剛史先生（社会哲学）率いる「海の照葉樹林とコミュニティ支援」プログラムとの協働が始まりました。雪の中を巡り歩き，植生を調べることから始めました（**写真４**）。次いで，学生たちと前浜で幼苗の採取や種拾いをし，そしてポット苗化，育苗をするという活動が早稲田大学と付属の本庄高等学院高校のキャンパスで始まりました。その育てられたツバキなどの苗は昨年（2014年）から前浜に里帰りし，植樹されています（**写真５**）。大学生や高校生，職員，OBの方々が定期的に前浜を訪れ，調査・交流をしつつ，植樹地基盤整備など土木作業も一つ一つ丁寧に手作業で共に汗を流しながら進めています。その際には，高齢者の方々のもつロー（老）テクの伝授などサバイバル学習の場も設けています（**写真６・７**）。

2014年には，廣重剛史先生の発案で，大熊記念講堂そばで管理していたポット苗の全てを大学近隣の戸山団地（高齢化率約50％）内の新宿区立戸山シニア活動館に移し，住民の方々と協働する育苗プロジェクトも始まりました（**写真８**）。その目的は，多世代交流による学生の学習機会の増加と，無縁化が進む都心の地域福祉の向上にあります。生活に密着した防潮林や防風林の可能性を開く前浜のツバキが，お年寄りと学生たちを繋ぎ，高齢社会を支える縁起の木として位置付けられています。そしてこの活動により，「被災地支援」という一方向的な関係性のイメージではない，「被災地と支援地域の互恵的関係」，地域を越えた社会統合の在り方が見えてくると思います。地域と地域，お年寄りと若者，そして前浜マリンセンターと戸山シニア活動館の間に介在するツバキと言う植物が果たしている意味は，決して小さいものではありません。

こうしたWAVOCとの架橋型社会関係資本の形成が，この「椿の森」プロジェクトの大きな特徴であり，最大の推進力です。廣重先生を中心とした学生の皆さんによる前浜の植生や民俗調査など草の根からの地道な関与がなければ，このプロジェクトは動き出さなかったと言っても過言ではありません。私たちは，住民参加と言う内発性だけではなく，何らかの外発的な力の贈与によって生かされているという「他律性の自覚」を忘れてはいけないとも思います。実はこのことこそが，伝承の未来の模索にとっても，根本から見つめ直されるべき視点ではないかとさえ思います。

６．伝統の椿油搾りへの回帰

津波で被災した場所に「ツバキば植えっぺ」という第一声は，被災後まだ春浅い清涼院の暗い物置の避難所・災害対策本部ででした。当時その本部長で，「前浜，おらほのとっておき」代表だった畠山幸治氏が「そして，まだ皆して椿油搾りばやっぺ」と発した時のことを忘れません。勿論，それは植樹などの専門家の知見や指導による発案ではありませんでした。被災後の暗澹たる状況の中で，協力し再出発しようとする草の根からの一つの理念ドライバー，或いは源郷回帰にも似たものを促すような声だったと思います。

その言葉を胸に，６月から招集された気仙沼市震災復興市民委員会に臨み，復興プロジェクトとして「防災自然公園ベルト，海の照葉樹林プロジェクト」を発案し，市の復興計画に盛り込むことができました。「前浜，椿の森プロジェクト」はその復興計画の地域住民主導による具体化された活動の姿です。しかし発案から４年が過ぎ，市政自体何のアクションもファシリテーションも起こしていない現実があります。これが「新しい公共」

を導き出す土壌と現実なのかも知れません。いま私たちに問われているものは，市民・住民の社会関係資本の健全さと強固さと，生態系に順応した地域づくりの可能性を理解し，やれることからやって行く市民自治の能力だと思います。行政は後からついて来ればいいとも思います。

「前浜，おらほのとっておき」の人々は，地元の歴史や伝統，生活・生業文化の再発見，休耕地の再生，一人一品文化祭や教養講座など多様な活動を行って来ました。その活動の重要な柱の一つが，「キリン」と呼ばれるケヤキ製の人力ネジ込み式圧搾機による「椿油搾り（キリン絞め）」でした（**写真９**）。彼らは20年程前にその伝統技法を復活させ，毎年恒例行事として来ました。前浜マリンセンター再建でも，中心的な役割を果たして来た人々です。その彼らが，伝統のツバキのキリン絞めを復活させた場所，それが旧前浜マリンセンターでした。「またあの場所に，必ず皆で集うんだ」という念いが，ひしひしと胸に伝わって来ました。

磯場の上，岩石海岸の崖に茂ったヤブツバキの林は，前浜の象徴的な風景です。昔から人々はツバキの油を搾り，大切に使って来ました。鬢付け油，刃物の錆止めに，肌用クリーム代わりに，料理にと。特に，各戸が順番に当屋を務めた「お精進あげ」の講での共食の儀礼食はケンチン汁でした。それには，たっぷりの椿油が使われていたと聞きます。ツバキは人々にとって大切な恵みであり，その紐帯の輪を結ぶ重要な植物だったと思います。また，ツバキの木そのものは，土留めの植栽として土地の保全にも使われて来ました。子供の頃には，ツバキの実で笛を作り，また鬼ごっことはツバキ林の樹中を渡り歩くことでした。今思い返せば，ツバキの木に擁かれていたような，そんな時代でした。

生活に密着して来たツバキという里の資本の文化サービスを，今一度しっかりと認識する必要があります。それは，身の丈において現実に可能な多くのことを無視し，巨大システムからの供給に繋がれた貧血構造の地域経済や行政依存への反省をも含めて。共同作業と共有による油脂原料の自給（地産地消），その社会参加，オレイン酸の健康効果，食生活への積極活用などツバキ林の供給サービスを引き出しつつ，更にその文化サービスや保全サービスを引き出す防潮林や防風林，森林公園などとして，防災・減災，余暇に活用して行くコミュニティのエコロジカルな在り方の模索（開発）が，この「椿の森」プロジェクトです。

７．近代の過剰から距離を置く

植樹と言っても，拘りがあります。それは地元前浜（或は気仙沼市内）の種子や苗を使うこと。その土地の気候風土に最も適した在来野生種，潮がかぶるような浜辺の環境に長い年月をかけて順応・選別された遺伝子を使いたい。安定した生態系サービスを持続し，そして防災と減災に貢献し，いつまでも住民たちを優しく擁いてくれるような森を造りたい。それは安易に市場に依存するのではなく，種拾い・苗作りから始める地道な活動です。またボランティアとの協働においても，短期間に大量の植樹用ポット苗を掻き集め，盛大に植樹祭を開催するようなことはありません。恐らく，これからもそれはないと思います。

出来るならば，地震と津波が与えてくれた大地のままで，あの災害にも生き残り，そのレジリエンスを静かに示してくれたもの達を丁寧に拾い上げ，認知したいと思います。私たちを取り巻く息遣いや肌の感覚や共感が伝わるような適正な規模と真摯な時間の中で，植物を，大地を，この植樹という行為を，E.F.シューマッハがその重要性を強調する「優しく愛情のこもったいたわり」（TLC：Tender Loving Care）のあるものにしたいと思います。時間に追われ，規模の経済に追われ，慈しみを失った近代の過剰から距離を置きたいと思います。

被災三県で，多くの住民を失望させながら建設が進んでいる巨大防潮堤（同様のものがこれから10年で200兆円をかけて全国に張り巡らされる国土強靭化計画）のようなモノと，私たちのスタンスは全く相容れるものではありません。しばしば，

この巨大防災インフラ建設がもたらす経済効果が強調されます。しかし文明の利器が肥大化・巨大化すればするほど,それは私たちの肌感覚を離れ,経済は救済という「いたわり」から離れていきます。多くの小さな（しかし大切な）存在を犠牲にしつつ，生活文化の認知，生態系，身の丈を無視した巨大システムによって，救済から乖離して行きます。失望，孤独，貧困…と言ったものを放置するようになります。それが，近代の私たちが抱える基本的なヒューマンエラーだと思います。

その意味では，中央大学の谷下雅義先生の研究グループの「海が見える地域の方が津波犠牲者が少なかった」という調査結果を真摯に受け止める必要があります。南三陸町の津波が到達した行政区での津波犠牲者率の調査で,「海が見える35の地区が約４％」「海が見えない10の地区は約16%」，海が見えない地域は４倍の犠牲者率でした。石巻市での調査でもほぼ同様の傾向が確認されています。「海に面していて」「徒歩で５分以内に避難できる高台がない」行政区では犠牲者率が低い傾向があり，また「高齢化率が高い地域ほど犠牲者率が低い」傾向も現れたといいます。防潮堤もなく，高台もない。そして高齢化率も高いと言った「一見すると津波防災上は不利な条件が，かえって逃げる意識を高め，結果として人命を守った可能性がある」としています（河北新報2014年６月23日）。生身の人間の心の在り方，ヒューマンエラーを前提とした津波防災への政策シフトが不可欠ということではないでしょうか。

単純増大型市場経済を前提とした防災インフラの肥大化，ショックドクトリンへの深い反省が問われています。病的な肥大化ではない，より長期的な合理性と調和，或いは持続可能性を模索するナリワイや生活の在り方が求められていると思います。生態系に適応した伝統的手法と適正な規模のコミットメントによって，救済という経済の本質から逸脱することなく，防災・減災を実現する道がある筈です。それらを追求する前提として，地理学的，或いは民族・民俗学的調査が丁寧になされるべきです。そしてそれは，私たちの生活・ナリワイと言うものが「死者たちと生きる地域社会の豊饒性」，或いは「自然への信仰と不可分ではない」という事を，私たちに教えてくれる必須プロセスだとも思います。

８．伝承の海を映す椿の聖林

母方の祖父畠山美代治，曽祖父の直作は「オワミ」と呼ばれる大謀網漁の大謀職（責任者）を長く務めていました。直作は現役を退いても，毎朝外で顔を洗い海に向かって柏手を打ち，海を窺い「鹿島潮」の到来を待ち，海べりに建つ熊野神社（オグマンサマ）のケヤキの葉色を見ては鮪の大漁を予感していたと聞きます（**写真10**）。八十の齢，着物姿で縁側の日溜りに腰を下ろした姿だけが記憶に残っています。聞き書きすべき「伝承の海」がポツンと佇み，私を静かに見守っていたことに，愚かにも今になって気づく次第です。海や自然の声に耳を澄ます，その非科学的な手法。自然克服型技術の肥大化とともに，そんな他律的で擬人論的な生き方，それを体現して来た人々を，私たちは安易に記憶の彼方へと追い遣ってしまいました。しかしそれは，自然や生態系に順応した優れた生き方だったのではないでしょうか。その彼らも既にいません。「どこに行ってしまったのか？」と，その魂の行方を思います。

青森県夏泊半島に「椿山伝説」というものがあります。嘉平とお玉の悲恋の物語で，海の向こうからのツバキ伝来の説話です。船出した嘉平の帰りを待ち侘びつつ悲嘆の中で命を閉じたお玉。その墓に嘉平は南の土地から持ち帰ったツバキの実を植えます。お玉の死から化生した一本のツバキが森となり，北限のツバキの群落「椿山」の起源となったとされています。

また，無数の死を看取ったとされる「八百比丘尼の伝説」があります。漁師の父が獲って来た不思議な魚（人魚？）を食べた少女が，不老不死となり諸国を巡ったとされるものです。自らの肉体の死を追い求め諸国を行脚し，いつしか比丘尼となった少女。死を恐れ逃れようとする人々は,八百比丘尼の言葉に永遠の生の虚しさを悟り,

比丘尼に擁かれながら安らかに死出の旅に発つ。八百比丘尼を象徴する行脚の杖が，やがて芽を吹き椿の森となったとされる「杖立伝説」がこの説話には伴っています。

ツバキという植物には，海や漁村，漁師という背景が映し出されています。そして同時に，死の問題も。野の仏たちが眠るツバキの林は，私たちの故郷でしばしば見かける風景です（**写真11**）。その「ツバキの森に擁かれた墓標群」は，八百比丘尼伝説の三陸型のヴァリアントでしょうか。ツバキの森は死者たちを包み込み，安らかな彼方（源郷）へと導き渡す象徴のようにも思えます。それは，ツバキという植物を媒介として，海の彼方に死者の世界があるという感覚（源郷の仮構）にも等しいものかも知れません。

８月16日の朝，父と二人，麦藁で盆舟を作った幼い頃の記憶があります。舟にお供物を載せ，水平線の彼方へと先祖の霊を送りました。三陸に暮らす誰の胸にも，海の彼方に思いを馳せる辛い記憶があります。まだ帰らぬ父や兄弟・息子そして友，遭難した者たちが広大な海のどこかで海神（ワタツミ）と共に暮らしているとする悲愴な願いが。この大切な海に，愛する者たちに思いを込めて盆舟を作り，浜の渚から「また来年，来てくれよ」と呟きながら送り出しました。私たちはその祈りの海に生かされています。南の海から回遊するマグロやカツオ，海の彼方に暮らす死者たちが毎年贈ってくれるその賜物を，私たちは受け取って来ました。

ツバキに擁かれた死者たち，その死者たちが海の幸に化すような「死体化生」の物語があるように思います。ツバキの林は，そうした魂の還流を象徴する霊的な魚付きの聖林と言えるものかも知れません。ツバキの木が持つ，深根性，直根性，厚いクチクラ層という性質は，防潮林や防風林の形成にとって，とても重要なことかも知れません。しかし，防災・減災を考える時により大切にしてほしいことは，信仰や伝統，環境をベースとした生活世界，その人々が「大切だ」と感じて来たことに対する認知と尊重だと思います。そうした前提があっての「椿の森プロジェクト」の防災・減災です。しかし，そのようなことが全く考慮されていない空間的なグレーインフラと箱物優先の惨事便乗型復興と言う現実に，今，私たちは曝されています。

９．女たちの祈り

女たちが沿岸での採集的な漁で一家を支えたオーストリックな海浜文化の香りが，三陸の女たちにも漂っていました。女・子供だけに許されたフノリの採藻開口も，その残り火の一つでした。磯で遊びがてら子供らが獲って来る幸が晩の夕飯に上ってもいました。賭けのような男たちの沖漁に対して，ヘコタレルことのない逞しい女・子供の豊饒の磯，或は生存権ともいえるような「食の安全保障」が磯場を舞台に機能していました。

女たちは，神社や祠など数か所を祈り巡る「朔日詣り」・「十五日詣り」をし，漁の安全と豊漁を祈願していました（**写真12**）。「板子一枚，下は地獄」。沖に出た夫や息子，身内へと手向けられた念いがありました。本来，男たちはこの両日は「海に出ない」忌日の慣わしでした。他日に比べ幸が多いとも言われる新月と満月に，聖日休業する伝承の理性に今更ながら驚かされます。また女たちは，オワミ（大謀網漁）の「初起し」にマスなど獲れた魚（ネノヨ）を持って，里を見守る日高見の端山を「山懸け」していました。オサンノサマ（山王山）からテナガサマ（手長山），そして巨岩の祠がご神体の正一位岩倉神社へと長い道のりを巡りました（**写真13**）。それは，不漁が続いた時にもなされていました。

母方の祖母，畠山きよゐは漁が振るわない時には「オガミサマ」と呼ばれる盲目の老女のもとを訪れては，改善（自然界や超自然的力との和解）策を尋ね，占い語りを聞いていました。祖母はまた，大きな竹籠に魚を背負って行商にも出たと聞きます。家の男たちが地崎の海で獲った海の幸を女たちが山手へと運び，コメなどと交換した時代がありました。浜で男たちに負けず溌剌と働く女たちがいました。海と陸との「あわい」から行商という「あわい」を遊行して。神々の加護に身を

委ねるような賭博性が漁撈には付き纏います。しかし地獄の上での不確実なナリワイを，女たちは陸（おか）の側から確実に支えていました。

小学生の時，初めて祖父と父と３人でアワビの口開けに行った時のことを憶えています。漁も終わり陸へと戻るダンベ（小舟）から，母と祖母が心配そうに波打ち際に立っているのが見えました。少し寒さが緩んだような気がしました。冬の海に出た家族を待つ舟迎え。何の変哲も無いありふれた光景かも知れません。しかし神々を巡り，山々を巡った女たちの強い祈りが支えた漁の無事と海の暮らしであったことを，いま心の底からから確信できます。その古層に，山の神が田の神となって稲を守る「山神遊行」にも似たモノが潜んでいます。「山懸け」をし，山の力を里海に運ぶ「漁護の神人」となって遊行するハハたちが守る領分。それが浜であり磯であり，マージナルで微妙で繊細で曖昧な「あわい」という生命線です。

浜の採集経済を支えた藻場・磯場は，同時に沿岸・近海漁業の依り代そのものとも言えます。藻場・磯場は魚貝の産卵場所であり，稚魚・幼魚の生育と隠棲の場所です。磯の浅瀬に擬態し身を潜めるオハジキ程のカレイなどの幼魚たちは，成長するとともに沖へと向かいます。大謀網漁などの沿岸・近海漁業を支えた回遊する大型魚の依り代が，私たちの生活のその直ぐ足許に暮らしていました。あの豊饒の磯は，漁民たちの命を繋ぐと同時に，海にとっても新たな命を宿し，守り育てる揺籃であり，その性は女たちの分限そのものだったと思います。干潟・磯場・藻場とハハたち女たちを同置する神秘主義的無意識，或は伝説や神話的祖型を反復する伝承の心性によって，その海のナリワイは持続されて来ました。

「漁の死体化生神話」とも言えるような，祖先や遭難した男たちの死と引き換えに贈られた大切な力。その生命原理が漁を再生し，私たちの命を再生させるという魂の還流とナリワイがありました。そこに介在する「ツバキ」という植物。それと対をなすように「磯辺の山神遊行論」とでもいえるような，ナリワイを支える女たちの祈りがありました。そこにあるのは，「ツバキと女たちをめぐる浜辺のシンボリズム」かも知れません。そしてもう一つ，森の奥の上流から流れ着き里に福を招く子供たちを彷彿とさせるような「磯に寄る小さ子」の揺籃としての母性，女たちの領分，或はナリワイの未来の問題です。気仙沼市の復興理念である「海と生きる」というものが本物であるならば，擬人論的な海（男）と山（女）との関係，その伝承的協働の理性の再認識があって然るべきと思います。勿論，海と山との「あわい」を分断し，その揺籃・生命線を蹂躙する巨大防潮堤建設など，到底，発想され得る筈もない事です。

防潮堤が作られる浜や磯場の問題は，沿岸の生態系サービス，その揺籃を象徴する母性に係わるものです。極めて個人的に，それは冬の浜に家族を案じて立っていた母や祖母に対する個人的愛着と決して切り離すことが出来ない問題です。母と祖母が祈り立っていた浜に対する蹂躙としての防潮堤を，私は決して認めることは出来ません。

10. もう一度，テナガサマ！

マグロなど大型回遊魚は，ツバキが生い茂る岩石海岸の直ぐ間近を泳いで来ます。その里海はかつて山の大男の領分でした。その山（森）の恵みが，魚貝の揺籃である磯の豊饒を育てて来たと言えるのかも知れません。その山の恵みと引き換えに，ダイダラボッチ伝説を持つテナガサマが，里海に巨大な手を伸ばし浚っていく「森の取り分」に対し，漁民たちはアワビなどの海の幸を手長山の頂に捧げ，そっとお供えしては和解（一種の「霊送り」）を図って来ました。また，山の巨岩がご神体の岩倉神社にはマグロが担ぎ上げられ献納されていました。

宮澤賢治の「狼森，笊森，盗森」での人と自然が話し合い，和解し，森からの贈与に対し穀霊宿る「粟餅」を返礼する共鳴し合う世界が，「女たちの山懸け」などによって，海と暮らす現実の生活の中で物語られていた時代がありました。そこには，私たちが忘れてしまった自然との倫理的関係，森と対話する擬人論的な生き方があったと思

います。人々は，山と海の間の生態系の縁起性に対する伝承の理性を失ってしまいました。その喪失の延長線上にあるものが，磯場や砂浜など海浜の「あわい」を蹂躙する巨大防潮堤建設だと思います。自然や生態系，自己を取り巻く存在に対し，擬人論的な倫理的関係性を見出せない「優しく愛情のこもったいたわり」（TLC）の欠如による収奪的漁業が，このような防災の姿を導いてしまったと思います。

コンクリート多用による線的防御ではない防災・減災を志向するために，私たちには伝承の理性への回帰が求められていると思います。文明の利器による短絡的な海や森，その推移帯に対する操作・封殺・分断ではない，アニミスティックな意味での海や森とのコミュニケーションの回復，自然との和解の上に立脚した防災・減災を求めるべきだと思います。未来への「ご恩送り」，遠く海の彼方へ送る「盆舟流し」，アワビを手長山の頂に捧げる「霊送り」。私たちはそうした配慮（TLC）が，単なる封じ込めの防災を越えて，結果的に人間の安全保障に繋がることを希望します。実は，この「椿の森プロジェクト」は，「前浜，椿アワビ」のブランディングをも志向しています。その椿アワビを，もう一度，テナガ様の頂にお供えする日を夢見て…。

11. テナガサマを越えて，あるいは最上黒澤に捧ぐ

前浜マリンセンターには巨大なコブシの大黒柱が鎮座しています（**写真14**）。棟持ち柱にもスギの巨木が使われています。それらは，山形県最上町の住民の方々が奥羽山脈を越え，北上高地を越えて，被災した三陸の小さな浜に贈ってくれたものです。最上町黒澤地区の方々は，その後も度々，野菜や米などを運び支援してくれています。私たちはこのことを決して忘れません。

2014年11月８日，前浜と黒澤は，県や市と言った人為的な行政区分を越えて，山と海との自然の繋がり，その伝統文化を基本に，また災害時の相互支援なども含む「友好交流協定」を結びました。この架橋型社会関係資本の形成が，新たな伝承の物語を綴り始めたように思います。

その１週間後の11月16日，「口開け」と呼ばれる朝６時半から９時まで許されるアワビ漁の解禁が前浜でありました。９時を回って続々と船が帰って来る浜に，「最上町へのアワビの寄贈にご協力をお願いします」という大きな紙を持った合羽姿の一人の若い女性が立っていました（**写真15**）。足元の箱には，浜の富であり，魂であり，縁起物のアワビがドンドン持ち寄られていました。その日の内に，その「浜の魂」は山の彼方の最上町や黒澤へと贈られました。

また，今年（2015年）９月20日，コブシの大黒柱への返礼と，黒澤・前浜の「友好交流協定締結記念植樹祭」を兼ねて，黒澤神社の境内でツバキの植樹祭を行いました（**写真16**）。前浜の住人約20人が30本ほどのツバキの苗を携えて黒澤を訪問し，そのまま盛大な交流会となりました。東日本大震災前は袖振り合う事もなかった海の前浜と山の黒澤が，宴もたけなわ「黒澤餅搗き唄」と「大谷大漁唄い込み」によるエール交換で夜は更けて行きました。

伝承への回帰，テナガサマ伝説，そのTLCが新しい形で始まりつつあります。相互の助け合いを忘れたグレイインフラ頼みの防災ではない，単なる利潤や合理性の追求の社会システムを越えた伝承の未来を，地域の自然資源と伝統知やロー（老）テクを駆使しながら，山の彼方の友人・知人・学生の皆さんたちと，丁寧に丁寧に手探りで模索して行きたいと思います。

◇椿の森プロジェクトの活動計画

A）津波で洗われた土地や伐採跡地への植樹

・種子採取，ポット苗作り，植樹活動

・植樹のための土壌基盤整備（地元資源＋老テクの活用）

B）住民参加・市民参加の推進

・植生調査と育苗のワークショップ

・WAVOCとの協働（＋本庄高等学院＋新宿区立戸山シニア活動館）

・防災・減災，植物学，生態学等に関するＥＳＤ

写真１：
ケラーラ州の新年、オーナム祭にトラが家々を門付け歩く。（2008 年ケラーラ州）

写真２：
多様な工程に住民全員参加を目指して、子供達もお手伝い。（2012 年）

写真３：
高齢化時代の住民主導・参加型のローテク公共事業が地域を変えて行く可能性を探る。（2012 年）

写真４：
WAVOC の「海の照葉樹林とコミュニティ支援」プログラム立ち上げ前に、前浜の植生などを廣重剛史先生と踏査。前浜らしい岩石海岸の崖に茂るツバキの林。（2012 年）

写真５：
津波が二階まで来た家の敷地法面の強化と防災･減災を兼ねて、今年 2015 年 9 月に行った植樹祭。東北学院大学の学生 6 人も参加し、住民や他大学の学生たちと交流を深めた。（2015 年）

写真６：
木造のマリンセンターに塗るための柿渋を仕込む東北学院大学の 2 人（工学部 3 年の市川大輔クンと経済学部 3 年の下村鷹也クン）。（2015 年）

写真７：
法面の植樹のためのフェンスに使う杭を作る早稲田大学 2 年の齋田悠平クンと目白大学 1 年の仲村秀帆クン。（2015 年）

写真８：
9 月の法面土木作業と植樹祭には、戸山団地の方々も参加した。（2015 年）

写真９：
ツバキの実を臼で搗き粉砕し、蒸籠で蒸したものをキリンで絞めて油を搾る。このケヤキ製のキリンは津波で流失。（震災前）

写真 10：
昭和 30 年、熊野神社での前浜地区敬老会の写真。右端の囲み円が曾祖父の畠山直作。その家はこのオグマンサマの直ぐ裏にあった。ケヤキを透して海が見えた。直作にとってここは、海や自然の声を聴き、生活や生業と係わる大切な場所だったのかも知れない。

写真 11：
海岸沿いの小高い丘や畑の中にあるこんもりとしたツバキ林の墓標群。（2011 年 大谷）

写真 12：
海縁に立つ神社や岬の突端の祠などを女たちは参詣巡った。しかし、そんな姿も今ではほとんど見られなくなった。（左：2012 年 大谷の崎明神，右：2003 年 前浜の熊野神社）

写真 13：
手長山など里海を望む日高見のハヤマを、女たちは魚を携えて遊行し、岩倉神社へと至った。そのことを記憶する方々も少なくなった。（2012 年）

写真 14：
樹齢 100 年と言われる黒澤神社のコブシの大木がマリンセンターの大黒柱（写真中央）。（2013 年）

写真 15：
テナガサマ伝説は、その日高見の翠屏を越え、奥羽山脈の最上・黒澤へと展開し始めた。（2014 年）

写真 16：
山形県最上町黒澤の神社で、ツバキの植樹をする前浜住民。（2015 年）

C）ツバキ油の伝統継承と普及啓発

・キリン絞め搾油法の伝統継承ワークショップ

◇期待される効果

A)「椿の森」グリーンインフラの形成

・地元植生による防災と減災：防潮林，防風林，法面補強

・魚付林，保健林，椿油原料供給林，その他気象緩和効果

・三陸ジオパークのサイト化

・震災復興国立公園「潮風トレイル」へのツバキ隧道の提供

B）魚付林を背景としたブランディング

・前浜ブランドの海産物…地域アイデンティティの補強

・住民による森林管理と浜の清掃活動など

・環境改善と経済的メリット連関についての住民意識の向上

・「新しい漁師の姿」その生業・生活スタイルの模索

C）生態系サービス向上による生活改善

・椿の森の多様なサービスを活かした持続可能な高齢社会の創出

・漁の労働生産性の向上と地産地消…貧血的地域経済の改善

D）市民住民参加型の活動

・地域社会の健全性，社会関係資本…互酬性，災害対応能力の維持

・地域社会間（ex.山形県最上町），大学，NPOとの協働の推進

E）高齢者の社会参加，知恵と伝統技術の活用

・知恵と経験を伝える…伝統技術の継承とサバイバル学習

・社会参加による健康寿命の伸長…「津波テンデンコ」の前提

・WAVOCと戸山シニア活動館の育苗…地域福祉と被災地の連携

付　記

本稿は，2015年４月28日に東北学院大学泉キャンパスで行った特別講義と，次の２つのエッセイをもとに構成したものです。

千葉　一（2015）：前浜，椿の森プロジェクト：エコロジカルな伝承の未来のために，BIOCITY, 61, pp.66 ～ 73

千葉　一（2014）：海浜のあわい：巨大防潮堤建設に反対する個人的理由。震災学，Ⅳ.pp.135 ～ 143

プロフィール：

東北学院大学など非常勤講師，同志社大学文化遺産情報科学研究センター共同研究員，TBCラジオ・ニュース解説者，大谷・大漁唄い込み保存会理事，気仙沼市震災復興市民委員会委員。専門は南アジア地域文化研究，宗教経済論。現在，宮城県気仙沼及び石巻地域の復興支援のかたわら，インダス文明の調査・発掘に携わっている。